

銀翼を きらめつかせつつ 千ぎれ雲

流るるあたりの 空ぬひゆけり

あたらしき 護国の英霊 祀ります

けふのよき日を 慎しみくらす

大君の 御艦詫びつつ 従容と

太平洋に 神鎮まりぬ

朝まだき 廊下伝ひて 看護婦の

歌声かそかに 渡りくるかも

かえりきて 破れし病衣の つくろいに

きびしき祖国の 姿をぞ見る

天のした 牢としなさん その日まで

いやつぎつぎに 生命ささげむ

いつとなく あの感激の うすれゆく

わが身思えば はがゆかりけり

傷つける 身は露ほども 悔いねども

戦進むを みるがかなしき

面会の 人もなき夜は 夜もすがら

故郷のことも 思い出つるかな

手術せし 友の痛みも とれたるか

かるきいびきに 夏の夜更くる

南支戦線 運の別れ目

初年兵から馬と共に

神奈川県 森 道一

人間誰しも過去がある。それが暗いか、ピンク色に彩られたかは人により、運命により、考え方により異なっているであろう。その軍隊体験を語

る者、語らない者もあろう。仕事に情熱を傾けて
いる若者、学業半ばに、青春の喜びに満ちていた
若い二人にも、戦争という黒い影にすべてを打ち
消されてしまった体験者も多かったと思う。

私は昭和十六（一九四一）年七月、甲府盆地に
ある、歩兵第四百四十九連隊に召集され、真夏の太
陽が、ギラギラと照り付ける中を、重い九二式重
機関銃を肩に喰い込ませ、額の汗を拭おうともせ
ず重い足取りで行軍をし、演習に精を込めて教育
を受けていた。

一期の検閲、二期、三期と過ぎると共に、同年
兵の姿は段々と少なくなっていた。入院する
者、この外地勤務に耐えられない者、作戦に討伐
に出動すれば、昨日まで一緒に食事をし、勤務し
ていた戦友が無言の者となって帰って来る。当時
の若者の命はこうして消えていったのである。

あれから五、六十年の歲月は流れ去り、すべて
の記憶は無くなっていく。これからの日本は平和

と繁栄を永久に続けていきたいと、願う気持ちは
私のみではないと思う。当時、カーキ色の軍服を
身に着け、鉄甲をかぶり、重い兵器を持って作戦
に討伐に、分哨勤務に、故郷を思い、遠く異国の
空の下の軍隊生活を思い浮かべながらの青春で
あった。

こうした生活も長くは続かない、作戦に、討伐
に出動すれば、昨日まで一緒に生活をした、兄弟
の如き戦友の若い命は消えてしまう。

軍馬「忠玉」の思い出

昭和十七年、春まだ浅き三月、私どもは東部第
六十二部隊（東京）、東部第六十三部隊（甲府）、
東部第六十四部隊（千葉県佐倉）で七カ月間の教
育を受け、南支派遣軍波第八一一三部隊（部隊
長、井上進大佐）、第一中隊長西田巴雄中尉、機
関銃小隊長北浦甫少尉、内務班長中村友三郎伍
長のもとに同年兵十一人が配属された。

配属の夜はお客さん扱いで古参兵も大事にして

くれ、その夜は何の勤務もなく過ごした。夜が明け「点呼」も終わり、当時、馬当番兵として水野上等兵、田村上等兵、田中一等兵の三人が勤務をしていた。点呼が終わると水野上等兵が「初年兵は馬屋に出て馬の手入れをしろ」と呼びに来た。

私共初年兵は十一人がぞろぞろとついで行く。馬屋の中には「久水」「忠玉」「加沈」「布面」、支那馬の「玉枝」「黄河」「陽爪」等の馬がおり、馬屋の中を見回すと、黒鹿毛の大きな馬がいる。

これが私と「忠玉」との初の出会いで、何気なく「この馬は良い馬だ、この馬を手入れしよう」と思い、刷毛と金櫛を持って「忠玉」に近寄ると、水野上等兵が大きな声で「やめるんだ、その馬は今まで誰にも手入れをさせないのだ」と叱られる。中村班長は後でニヤニヤと笑っている。私はこの馬を自分の手入れ馬にしようと、その時思った。

頸筋を叩きながら馬に近寄り鼻面をなでてやる。馬の奴、この新米、素人でないなと鼻面を寄

せてきた。普通、金櫛を先に掛け、後に刷毛を掛けるので、刷子を掛け、金櫛を頸筋から始める。その都度、胸、横腹と順次に手入れをするように心掛けた。機関銃の兵は他の小隊の者が使役に出ても、機関銃の者は馬の手入れ、馬運動に出かけるので使役には出ないで済み、他隊の者に羨ましがられた。

馬運動の度に私は「オジイ」という年老いた、栗毛に乗るのはやめとなり、中村班長が「森は人がよいから、手入れの時は忠玉で、乗る時は他の者に取られてしまう」と笑われた。

私は幸いにして上官、上級者に認められたのか、同年兵の中では上位にいたことができた。その後、中山県地区から広東市内へと勤務地が代わったが、南支軍官邸衛兵と三カ月位勤務して、硫黄島で玉砕した栗林中将が軍司令官として広東に出発の折、馬頭棧橋まで見送った思い出が今だに思い出される。官邸を出られる時は乗馬で、私は捧げ銃で敬礼をしたのであった。

その後、南支軍にも大移動があり、我が部隊も、多くの者、特に若い者の転属があった。その中には優秀な者が多く、皆不思議に思っていた。転出者は、南方とのことで優秀者を選抜せよとのことであつた。任地は、ガダルカナルらしいのと、残つた者は助かつたと思つた人もいたとのことである。

しかし、残つた者は湘桂作戦で多くの犠牲者を出したが、転属者の小鷹中隊長以下は中山県で多数の戦没者を出した。軍の情報は、一般の我々が判断することとは逆の結果であり、幸、不幸は、我々下部の者には判断も、予測もできないことを知つたのである。

まさに、軍隊では運・不運の別れ目は、予想することができないということを、我が部隊の転属者を見ても判るのであつた。「死ぬべき命、永らえる者」と、「犠牲が少くないと思つていた隊に犠牲者が多くあつた」これは、帰還後の戦友会や、靖国神社での慰霊祭で判然としたことである。

転属した我々の隊の状況について次に述べてみる。

新設大隊（直兵団）は、四月に中山県石岐市に移動し、節兵団、独立歩兵第二百六十大隊と警備交替し、その任に就いた第一中隊は浮圩地区、その周辺の警備についた。中隊の主力は、広東白雲山下士官学校で機関銃教育のため分遣となる。将兵の技術・戦技の向上に努力したのであり、旧母体たる節兵団は（独立混成第二十二旅団）は次期湘桂作戦に備え江門地区に集結し、日夜訓練に励み、次期作戦のため、前面の敵と攻撃・小作戦を実施していた。

我々は教育を終わり、帰途江門に立ち寄り旧友と久しぶりに再会したが、その中の一部の戦友は湘桂作戦で戦死をしたことを後に知つたのである。我々直兵団の部隊も、ポルトガル領澳門の状況悪化のため、対岸、前塞山に進出、警備にいたりした。

中山県浪網沙附近の状況悪化のため警備上同地

に小哨を設置し、第二小隊関少尉以下一個小隊及び前野兵長を長とする機関銃一個分隊が配置された。

八月に至り部隊本部に於いて、各中隊対抗銃剣術大会準備のため中隊に於いて各小隊により選手を選抜し、部隊本部に於いて強化訓練が行われた。中隊は見事に優勝の栄冠を勝ち得たのである。中隊本部は安藤曹長以下指揮班、機関銃一個分隊、各小隊残留者のみで戦力は低下していた。

八月十二日、森兵長以下十人は浮汗分哨勤務となる。

八月十六日、第三小隊長有田中尉以下、第二小隊関少尉以下と、浪網沙小哨交替したのであるが、その帰途小鷹中隊長以下第二小隊主力が敵襲を受け、小鷹中隊長以下二十人が戦死をする。

八月二十日、小鷹中隊長戦死に伴い、第三小隊長有田二郎中尉が中隊長に補せられたのである。第三小隊長代理に小山正信曹長が小隊長を勤め、

機関銃小隊長に、班長の清水富雄軍曹は、第二小隊長に転出し、機関銃小隊長は班長代理として森伍長がその任に就く。

九月に、石岐南方地点鶏山附近の状況悪化に伴い、各中隊主力は、石岐部隊本部に一週間待機する。その間に機関銃小隊、三カ月間の演習計画表を提出せよと、部隊本部の指示で、森兵長、石井上等兵等が参画し、これを作成し、部隊本部に提出する。

五鶏山討伐に部隊以下各中隊は早朝部隊本部を出発し、薄暮現地に到着するも、敵影認められず、その日は現地に野営する。翌朝附近を索敵すれど敵影認めず、部隊は五鶏山を出発し雨中部隊本部に帰隊する。

昭和十九年十月、第一中隊は浮汗地区を撤退し、九江地区に移動し、その地の警備の任に就く。

長井曹長が指揮班の配属となり功績任務を担当

する。九江に到着し、一旦旧舎に宿泊する。大隊が駐屯しており、その翌日警備交替する九江は、馬鞍岡、小哨、軍舟橋分哨、馬頭分哨、中隊本部衛兵所となり、馬鞍岡小哨に早川曹長以下二十二二人、軍舟橋分哨に秋山軍曹以下十二人、馬頸分哨は中隊より一週間交替の勤務であった。

波山地区状況悪化に伴い、九江対岸に分哨を設置する。分哨長小出分哨長以下五人は着任地点に急行し、その警護にあたる。夕闇頃、敵兵、農民も区別し難き者襲撃して来る。小出分哨以下これを撃退する。他の一人は中隊本部に急報する。急報を受けた有田中隊長は非常呼集をかけ、吉岡少尉以下一個小隊は救援に出動、救援に向かうも既に撃退しており、分哨を補充し、帰隊する。

南支那方面の共産軍は、北支の八路軍とは異なり、中支那の新四軍である。また蒋介石軍は北支と比較すると兵力は少ないとされている。特に南支那の場合は戦力は特に強力では無いが、南支那に於いては、物資、権益を獲得するため、雑軍

というか旧軍閥の兵力も無視できない状況にあった。従って、それぞれの軍閥の利益確保のため、日本警備隊の弱点を見ると、攻撃することが多かった。このため、我々警備隊は油断することなく、地域の警備に万全を期すべく、日夜緊張をした任務を背負っていたのである。

戦場は、北も南も無く、敵の中での点・線の確保であり、その勢力範囲は面にまでは至らず、常に少数兵力で敵に対し警戒、小戦闘の連続であった。少しの油断も、敵に乗ぜられ、警備隊は犠牲を強いられることが多かったのである。

従って前に述べられたように、九江地区の治安は保たれたと言っても、珠江支流の対岸に蒋介石軍や、雑軍が多数存在していたのである。その名、少数の分哨や、行動中に敵よりの攻撃を受けて損害が多く、戦没、戦傷者が時々発生していたのである。

このような毎日を我々警備隊は体験しつつあり、時に予期せぬ戦闘、襲撃があり、一瞬の油断

もできない日常が続いていたのである。

しかも、戦局は逐次悪化し、加えて、在支米軍の兵力は逐次増強され、都市部や、占領地区に対する空襲は日毎に増大し、我々は対支、対米、そして対地、対空の戦闘のため日夜警戒を厳重にせざるを得なくなつたのです。そして、斬り込み隊の編成が発表され、私や高橋軍曹の他、同年兵の坂田兵長等三十人は大岡塘を下山し、中隊本部に帰隊したのである。

切り込み隊要員が中隊に戻ってみると、既に日本は全面降伏とのことであつた。予想もしない敗戦。こんなことでは何が起るか判らぬので、私は「銃は各人が抱いて寝る」「歩哨はどこどこに立てる」等と指示をする。そのためか、その夜は無事に明けたが、敗戦により、諸々のことが起こり、人の心や、軍紀の乱れなど、敗戦とは情けないものだと痛感した日々が続いた。

しかし、日本軍はやはり日本軍で、規律は再び戻り、全員が無事帰国する日が来たのである。

山上の分哨

東京都 佐藤 喜多郎

召集前は父母共健在で家業のパン・洋菓子の製造、卸を業としていた。九人兄弟の長男だったので学校を卒業するとすぐ手伝いをした。他の兄弟も学業を終えると手伝いやら見習奉公にでた。

あれこれする中、昭和十六（一九四一）年十二月八日、太平洋戦争が勃発した。

支那事変が（日中戦争）長引くのでこれを終結させるためと称されていたが、我々には真相は分からなかつた。それより米英相手の戦争で勝てるのかとの不安の方が大きかつた。

昭和十六年十二月二十三日、東部第十七部隊に入隊した。衛生隊で、世田谷区に兵営があつた。

富士山麓の瀧ヶ原練兵場で教育訓練を受け、そこで一期の検閲が行われた。